



Data

監督・脚本・出演: ナディーン・ラバキ

出演: ゼイン・アル＝ラフィア／ヨルダノス・シフェラウ／ボルワティフ・トレジャー・バンコレ／カウサル・アル＝ハッタード／ファーディー・カーメル・ユーセフ／シドラ・イザーム／アラア・シュジュニーヤ

👁️👁️ みどころ

『私の中のあなた』(09年)では心臓病の長女サラに腎臓を提供するため、遺伝子操作つまり人工授精によってドナーの子供アナをもうけたにもかかわらず、11歳になったアナが「腎臓提供を拒否する」と母親を提訴した。それに対し、“レバノンの美しき才能”が放った本作では、12歳の少年が両親を「僕を産んだ罪」で提訴。しかし、そんな裁判が成り立つの？

『判決、ふたつの希望』(17年)はレバノン初の「裁判モノ」として興味深かったが、本作ではその貧民窟で暮らす子供たちの悲惨さが顕著。11歳の妹を無理矢理嫁に出された上、幼い妊娠で死亡。自分の面倒をみてくれたエチオピアからの不法移民の女性も幼い子供を残したまま逮捕されてしまったら、この少年はどうやって生きていくの？

そんな少年が、刑務所の中で知ったテレビの生番組『自由の風』に電話をかけて「大人たちに聞いてほしい。世話できないなら産むな」と訴えると・・・。

是枝裕和監督の『万引き家族』(18年)と対比しながらこの悲痛な問題提起作をしっかり受け止めたい。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■裁判モノの新作がレバノンに登場！その若き才能とは？■□■

私は2019年3月に『“法廷モノ”名作映画から学ぶ生きた法律と裁判』を出版した。そして、そこではハリウッド、日本、ヨーロッパにおける「裁判モノ」の名作だけでなく、韓国、中国はもとより、『第8章 その他の国々の法廷モノ』において、インド、イラン、レバノン、フィリピン等の珍しい(?)“法廷モノ”の名作も紹介した。そこで、レバノン

生まれの初の法廷モノとして紹介したのが『判決、ふたつの希望』（17年）（『シネマ42』147頁）だった。これは、1963年にレバノンの首都ベイルートで生まれ、レバノン内戦下で少年期を過ごした後、20歳の時にレバノンを離れてアメリカに留学し、サンディエゴ州立大学で映画学位を取得したジアド・ドゥエイリ監督作品だった。

それに対して、パンフレットのイントロダクションで「レバノンの美しき才能が放つ過酷で理不尽な世界を変えていく、その初めの一步となるヒューマンドラマ」と表現されている本作は、1974年にレバノンのベイルートで生まれ、内戦の真ただ中で育った女性ナディーン・ラバキー監督作品だ。もちろん、私は知らなかったが、そんな「レバノンの美しき才能」は2005年に初の長編映画を監督した後、華々しい活躍を続けてきたらしい。

■□■俳優たちは？裁判のテーマは？■□■

2018年のカンヌ国際映画祭では是枝裕和監督の『万引き家族』（18年）がパルムドール賞を受賞した（『シネマ42』10頁）が、本作はそこでコンペティション部門審査員賞とエキキュメニカル審査員賞をW受賞した作品。是枝監督は『そして父になる』（13年）（『シネマ31』39頁）に続いて、『万引き家族』では主役となる子供たちにピッタリの子役を発掘したが、それはナディーン・ラバキー監督も同じだ。つまり、本作で12歳の少年ゼイン役を演じたゼイン・アル＝ラフィアも、彼を助けるエチオピア人移民の女性ラヒル役を演じたヨルダノス・シフェラウも、プロの俳優ではなく、演じる役柄とよく似た境遇の人々が選ばれたらしい。つまり、ナディーン・ラバキー監督は、弁護士に扮したラバキー以外はすべて、感情を「ありのまま」に出して自分自身を生きてもらい、彼らが体験する出来事を演出する手法をとったわけだ。本作ではそれがいい効果を發揮している。

世界各国の「裁判モノ」はそれぞれ面白いが、裁判制度や法廷の姿は国によって違っているから、日本人の観客はその方面の勉強が必要だ。『判決、ふたつの希望』も民事裁判なのか刑事裁判なのか？そもそも、請求の趣旨は何なのか？等々難しい問題点がたくさんあったが、さて「レバノンの美しき才能」が描く「裁判モノ」たる本作のテーマになる裁判とは？

■□■12歳の少年が両親を「僕を産んだ罪」で提訴！■□■

キャメロン・ディアスが強い母親像を演じて熱演した『私の中のあなた』（09年）は、11歳の次女アナが母親サラに対して提起した、「長女ケイトへの腎臓提供を拒否する」旨の裁判がテーマだった（『シネマ23』42頁）。すなわち、2歳のケイトが白血病に侵されていることが判明した時、サラは医師から「法的に許されるかどうかはわからないが・・・」と前置きした上で聞いた「遺伝子操作つまり人工授精によるドナーにピッタリの3番目の子供をもうける」という選択をし、夫とも合意の上で次女アナを産んだ。以降、サラは弁

護士としてのキャリアも結婚生活の楽しみも捨て、人生のすべてを犠牲にしながらケイトのために生きてきた。そして、ケイトに対しては「頑張れ、頑張れ」とハッパをかけ、アナに対しては白血球の提供やリンパ腺の注射、その他肉体的に負担のかかる注射（＝犠牲）を次々と実施してきた。

そして今、11歳になったアナには、2つしかない腎臓のうち、1つをケイトに提供することが求められていた。そんな中、アナは腎臓の提供を拒否し、前記の裁判を提起したが、それに対して弁護士であるサラは、原告適格などの訴訟要件が欠けていることを理由として、申立て自体の却下＝門前払いを求める申立てで対抗した。しかし、これらの裁判の行方は？

それはあなた自身の目ではっきり見てもらいたいが、本作では、その冒頭、「何の罪で両親を訴えるのか？」と質問する裁判長に対して、主人公の少年は「僕を産んだ罪！」と答えたからビックリ！この少年の名はゼインだが、「何歳か？」と聞かれても正確な年齢は答えられないらしい。それについては、ゼインについている女性弁護士は、「両親が出生届を提出していないため誕生日も不明だが、おそらく12歳ぐらいです。」と答えていたから、またビックリ！レバノンの貧民窟で、父セリーム（ファーディー・カーメル・ユーセフ）、母スアード（カウサル・アル＝ハッダード）、そしてたくさんの兄弟姉妹と暮らしていたゼインはもちろん学校にも行っていない。そして、路上で自家製のジュースを売ったり、ボロアパートの大家のアサードが営む雑貨店を手伝ったりして一日中働かされていたが、出生届すらしていないとは、レバノンは何とひどい国！

本作は冒頭のこの法廷シーンをみただけで問題提起の鋭さがすぐにわかる。もともと、弁護士の私には刑法における罪刑法定主義つまり「法律なくして犯罪なし」の大原則が身に染みているから、ゼイン少年が訴えた「僕を産んだ罪」で両親を有罪にできるとは到底考えられないが・・・。

■子どもたちの貧困と悲惨さは『万引き家族』以上！■

日本では戦後すぐの昭和22（1947）年に児童福祉法が成立したが、今から2年前の平成28（2016）年には、その第1条が「全て児童は、児童の権利に関する条約の精神にのっとり（中略）その心身の健やかな成長及び発達（中略）を等しく保障される権利を有する」と改正され、第2条も「社会のあらゆる分野において、児童の（中略）意見が尊重され、その最善の利益が優先して考慮され、心身ともに健やかに育成されるよう努めなければならない」と改正された。そんな恵まれた法制度上にある今の日本だからこそ、『万引き家族』にみる両親からネグレクトされた幼い女の子ゆりと、ゆりを自分の子供同様に育てる万引き家族の姿が印象的だった。しかし、今や日本は世界有数の「豊かな国」になっているから、貧富の格差をはじめとするさまざまな社会問題はあっても、中東の国レバノンを舞台とした本作にみる貧困や児童婚そして薬物の蔓延等の実態に比べると雲

泥の差があることがよくわかる。

本作冒頭の法廷シーンでの問題提起が終わった後、貧民窟で暮らすゼインやその妹サハル（シドラ・イザーム）の姿が映し出されるが、その貧困と悲しさはどう見ても『万引き家族』以上。そんな中、両親がサハルをアサードと結婚させようとしている姿が映し出されるが、サハルはまだ11歳。日本では女性の婚姻年齢は16歳と定められているが、レバノンでは？驚くことに、後に証人として出廷した父親は、レバノンでは「それくらいの年齢の女の子が結婚するのは普通です」と証言していたが、それってホントにホント？また、ゼインたちは自家製ジュースを道で売っていたが、いかにも不衛生なこんな飲み物を買う観光客がホントにいるの？また、ゼインはインチキの処方箋を使って薬局からもらった薬を海水に溶かして怪しげな薬物（興奮剤？）を作って販売していたが、ホントにこんなものが売れるの？

日本のマスコミではさかんに児童虐待のニュースが流されており、『万引き家族』のような実態があることは明らかだが、本作を観ていると、レバノンにおける貧困と悲しさは『万引き家族』以上であることが実感できる。そしてある日、ついにサハルはアサードと無理矢理結婚させられることに。ゼインはサハルと逃げようとするが間に合わず、サハルは無理矢理父親のバイクに乗せられ、連れて行かれてしまった。いやがるサハルを泣きながら見送ったゼインは、そのまま家を出ていったが、その生活は……。

■□■不法移民も大変！ラヒルの場合は？■□■

レバノンの貧民窟で生まれ育った少年ゼインが大変なら、世界各国からレバノンに集まってきた（不法）移民も大変だ。エチオピア人移民の女性ラヒル（ヨルダノス・シフェラウ）は偽造の滞在許可証で働いていたが、もうすぐ期限が切れるため、偽造屋のアスプロ（アラア・シュシュニーヤ）にその偽造を頼んでいたところ、相場より高い値段をふっかけられて困っていた。ヨナスを渡せば無料にすると持ちかけられたが、息子を里子に出すなど、ラヒルにとってはありえないことだった。本作では、家を飛び出したものの行くあてもないままバスに乗ったゼインが遊園地の前で降り、仕事を探して回る姿が描かれる。そして、僅かなお金しかなく、食べ物も買えなくなったゼインを見かねて、レストランで働いていたラヒルがゼインを自分のバラックに連れて帰るところから、2人の奇妙な共同生活が始まっていく。

『万引き家族』におけるゆりと万引き家族との出会いがかなり劇的だった（？）のに比べると、本作におけるゼインとラヒルの出会いは平凡（？）だが、外に出て働くラヒルの代わりによちよち歩きの子供ヨナス（ボルワティブ・トレジャー・バンコレ）の子守をするゼインの姿の描写には、かなりの力を注いでいる。乳飲み子が母親の乳房をまさぐるのは当然だが、12歳の少年ゼインがそれを求められた場合、それをどう受け止め、いかに子守の仕事を全うしていくのだろうか？

■□■母親が逮捕されると？残された乳飲み子とゼインは？■□■

もっとも、不法移民の増大に悩みを持つ世界各国はどこでもその取り締まりを強化している。したがって本作でもそんな描写が何度も登場するが、自分の髪を売って何とか偽造屋のアスプロに払う金を工面したラヒルが市場へ行ったきり朝になっても帰ってこなかったから、困惑したのはゼイン。まち中を捜し回り、アスプロにも会いに行ったが、ラヒルの姿はどこにもなかった。それもそのはず、その時ラヒルは不法就労の疑いで警察に拘束されていたのだから。

柳楽優弥が第57回カンヌ国際映画祭で最優秀男優賞を史上最年少で受賞した是枝裕和監督の『誰も知らない』（04年）では、自分の幸せを求めて蒸発した母親から残された4人の子供たちがたくましく生きる姿が描かれていた（『シネマ4』161頁）。それと同じように本作中盤では、突然いなくなってしまったラヒルに代わって、よちよち歩きのヨナスの世話をしながらたくましく生きていくゼインの姿が描かれるのでそれに注目！

ちなみに、そこでゼインが考えついた現金収入の道は、薬局で嘘をついて手に入れた薬を海水に溶かして売ること。どうも、それが結構なお金になるらしい。しかし、ある日外出中に大家に家の鍵を換えられ、稼いだお金を隠していた家から閉め出されてしまうと…。不法移民も大変だが、ゼインも依然として大変だ。

■□■殺人事件で刑務所に！そこでのゼインの決断は？■□■

稼いだカネを隠していた家から閉め出されてしまうと、さすがに万策尽きたゼインは、アスプロに言われるままヨナスを引渡し、その金で国外へ渡る決心をすることに。そのために身分証が必要だと指示されたゼインが久しぶりに家へ戻ると、そこで嫁に行った（行かされた）11歳の妹サハルが死亡したことを知らされたから、ゼインが激高したのは当然。ちなみに、サハルの死亡は11歳という年での懐妊によるものだから、あまりにも悲惨だ。

そこで、ナイフをつかんで家を飛び出したゼインはアサードを刺殺し、それによって懲役5年の刑を言い渡されたが、本作でのその説明は少しだけ。それは、法廷モノの名作『ダブル・ジョパディー』（99年）で、私の大好きな女優アスレイ・ジャッドが演じたヒロインが夫殺しの罪で有罪とされ、あつけなく刑務所に収監されてしまうのと同じだ。しかし、『ダブル・ジョパディー』では、刑務所の中で弁護士の女囚から「ダブル・ジョパディー」＝「二重処罰の禁止」つまり、「人は同一の犯罪で二度処罰されることはない」という考え方を教えられたヒロインが「ある決意」をすることで本格的なストーリーが始まっていった（『シネマ1』38頁）。

それと同じように、本作でも、少年刑務所に収監され傷心の日々を送っていたゼインがある日社会問題を取り上げるテレビの生放送番組『自由の風』に電話をかけて「大人たち

に聞いてほしい。世話できないなら産むな」と訴えたところから、本作の本格的なストーリーが始まっていく。つまり、そこからゼインは両親を訴えることになり、今日第1回の法廷を迎えたわけだ。ゼインからそんな訴えをされた両親が困惑したのは当然だし、やむをえず弁護士を立てて防戦したのも当然。もっとも、弁護士の私ですらゼインの「僕を産んだ罪」での提訴はかなり無理筋だと思うし、法的理論立てをどうしているのかがサッパリわからないから、両親側の弁護士の防御は容易！？

『万引き家族』では結局「育ての親より産みの親」の論理が勝ち、「万引き家族」は解体させられてしまったが、さて、本作の裁判の行方は？それはあなた自身の目でしっかりと！

2019（令和元）年8月22日記